
大きな銃に小さな手

九条 ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな銃に小さな手

【Nコード】

N6906Y

【作者名】

九条 ネギ

【あらすじ】

近年、裏社会で最も恐れられた殺し屋。片手にマグナムと、黒いコートがその特徴とされる『カフィン』が、突如姿を消した。彼が消えた後、最強の席を一人の少女が埋める事になる。この少女は、一体……？

懺悔という名の自己満足

ごめんなさい。　ボク、悪い事をしました。
何って、簡単だよ。　ボクが君に、悪戯をした。
壊しちゃった。　捻じ曲げちゃった。

その頭は飾りか。　ボクの頭はただの飾りだ。
君の頭もただの飾りだ。　ボクから見れば。

頭どころか、ボクに身体は飾りでしかない。

君が大好きになったから、ボクに合わせて君を変えた。
さて、君の身体はどうなったのでしょうか？

朝起きたら。　事故に遭って。　氣を失って。

いつの間にか。　知らないうちに。　氣付かない内に。

君はボクの都合で、作り変えられたんだよ。

風を流れる。　小さく弱い悪魔の手にかかってね。

『君は、何も知らないお姫様になったんだ。　ボクの気まぐれに
当てられて』

懺悔という名の自己満足（後書き）

ぶっちゃけ、第三部辺りまでは暗いだけで面白みが無いかもしれないです。

ぼやきと言う名の自己満足（前書き）

この自己満足文は縦書き読向けに書かれています
横書きなので若干読みにくいです

ばやきと言う名の自己満足

「ブルーノの額に弾丸を撃ち込め」

依頼主は、確かにそう言った。本日のターゲットは、ブルーノと呼ばれる金髪の男。写真の通りの奴に弾丸をねじ込めば、俺の任務は完了だ。

彼はその気に入っているコートに身を包み、事務所の外に止めてあったバイクにまたがった。闇にその黒髪を馴染ませ、その青い瞳は闇に浮かぶ猫の瞳の如く。異様な雰囲気放っている。

キーを捻り、エンジンを掛けると同時。音も無く、彼は闇の中へと姿を消した。

月明かりの下で、素早く動き回る小さな影。それは、ビルの屋上から見えている所為かもしれない。

時折、火花を撒き散らすその黒いコートの男は、次々に警備員達をなぎ倒すとビルの中へと侵入した。傷など、一切負うことなく。まるで余裕の表情を崩しそうに無い。ただ、この表情は彼が明日起きた時には消えているだろう。ボクの手によって。

「中々、強いんだ」

ビル風によって吼えるような音が響く。ビルの屋上のアンテナから逆さにぶら下がる彼女は、楽しげに小さく呟いた。

「侵入者だ、銃を持ってるぞ！」

彼の侵入した一階では、大騒動が起きていた。いまこのビルの中では、とある兵器製造業者のパーティーが行われている。それを聞けば、恐らくは誰もが『兵器製造業者の主要人物を殺しに来たに違いない』と、思うことだろう。

全く持って、その通りだった。

彼は歩みを一切止めることなく、それどころかその直進を維持したまま。的確に敵の急所にその弾丸を次々と撃ち込んでいく。

彼の通った後には硝煙の、死の匂いが残されている。

使っている銃は、至って普通。

特注品ですらないだろう。ただの、マグナム。それも、型にはめられて量産されている。身分証名称を持って銃器を扱う店へ買いに行けば誰もが購入可能であろう代物だった。

「俺は、お前らの頭……ブルーノに用がある。死にたくなけりゃ、道を明けろ」

彼の一言は、とても青年とは思えないものだった。

逆らえば、殺される。そんな死神のような一言は、聞いた者の戦意を瞬く間に消し去った。並の人間に、太刀打ちできるような相手ではない。

銃を取り上げたとしたら？ いや、無理だ。奴はまだ武器を持っている。

それから、たった十分間の出来事だった。彼は標的の居るフロアに到達し、その銃の引き金に指を掛ける。標的の横に居るボディガードも成す術は無く、ただ見守るだけだった。

「見つけたぜ、ブルーノさんよォ。面倒臭かったぞ、雑魚の相手は」

その銃口の先には、金髪の男が。無念といった様子で、立ちすくんでいた。

「貴様……カフィンか!？」

その男の口から、そんな言葉が吐き出される。

「ああ、俺はそう名乗った覚えは無いが。そう呼ばれている。……俺も、使われる人間なんだ、悪く思うなよ」

爆竹のような爆発音が、そのテーブルに並んだワイングラスを貫

き、砕く。

銃口から吐き出される小さな衝撃波に、彼の黒髪が揺れる。青い瞳は、瞬きをすることなく。その弾丸が、ブルーノの額にめり込む所まで。そして、紅い液体を吐き出す所まで。ハッキリと、その瞳で確認する。

「さて、任務官完了か。……そこのゴリラ」

ため息をつく、カフィンがボディーガードの一人に札束を投げ渡した。相当な額らしく、啞然とするほか無い。どういう、意図で……？

「これは……？」

「仕事ご苦労さん、依頼主が死んだら報酬が無いだろ？ 大人しくしてた礼だ、俺が払ってやる。それと、早い所その馬鹿ブルーノを持って帰ったほうがいいぜ？ 俺は依頼で“ブルーノの額に弾丸を撃ち込め”と言われて来てるんだ、何て弾だろうがその辺は俺の自由。

さて、俺は早い所、警察が来る前に撤退させてもらうぜ」

それだけ言い残すと、彼は窓ガラスを突き破り、闇の中へと姿を消した。

ぼやきと言う名の自己満足（後書き）

ブルーノ・デイヴィー

性別 男

職業 兵器製造会社の社長にして、兵器の密売人

侵入者という名の自己満足

行きと同様、彼はバイクで帰宅した。音の出ないよう加工しているらしく、電気エンジンにサイレンサーをつけたような。黒いボディであるのも相まって、それは闇の中では不可視にも近いステルス性能を発揮していた。

だが、そんな小さなことは、彼のオプションでしかない。

彼の真骨頂はその圧倒的な強さと技能にあり、ステルスバイクなどは面倒ごとを避ける無駄な小細工でしかなかった。

キーを引き抜き、事務所の敷地に入れる。事務所の鍵を取り出すと、彼は面倒くさそうに顔をしかめた。取り出した鍵は、直径五センチ程度のリングにざっと十個以上。そして、扉に設けられた鍵穴はそれの二倍。二十個。

そして、この鍵穴は単純に一つの鍵で二つの鍵をあけるのではない。ランダムに、一つの鍵で最低一つの鍵穴を開ける。その組み合わせは“千四十序通り以上”せんよんじゅうじよが存在する計算になるわけだが。

実際、鍵の形状の問題で十の十乗、百億通りがいいところなのだが、それが二つあるわけで。現実的な数字は、二百億通りの開け方を試さなければ、この扉は鍵を持っても開けない。

鍵と鍵穴の組み合わせを忘れれば、恐らく。誰にも空けられない開かずの扉になるだろう。

そして、その組み合わせはカフィンしか知らない。もし、扉を爆破して侵入しようものなら炎熱反応で作動する機関銃の餌食である。

その面倒くさい鍵をあけ終わると、彼はその瞳を凝らし、

「誰だ、何処から入った？」

闇の中に居る“何か”に対し、問いかける。傘立に、見たことのないような白い傘が刺さっている。

そして、もう一つ。“何か”がいるという情報を、匂いが伝え

ている。淹れたばかりのコーヒーの匂いと、もう一つ。揺り椅子の椅子のきしむような音。

……何者だ？ 開錠して入ったか……？ いや、あれを外すには相当時間が掛かる。それこそ、今しがた外出した一時間弱の時間だけで開ける事はまず無理だ。

何だ？ 『幹部』の……指令伝達であれば有り得ない事ではないが、俺に顔を合わせる決まりがある。闇に紛れていれば、俺が撃ち殺すという行為に出ても良い決まりだ。なのに、その危険を冒すのか？

そこまで考えれば、『幹部』とは関係ない部外者が、この事務所に不法侵入したと考えるのが最も理由としては辻褄が合う。

「三秒だけくれてやる、居れば居ると言え」

静かに、腰に挿していたマグナムを手に握った。

「三」

安全装置を外し、撃鉄を引く。

「二」

気配の元に、銃を向けた。

「一」

「ゼロ？ 居るよ、居る居る。チョット待って、暗くて見えなくってさ」

高い、女の声。そして、闇の中を慌しく歩き回ると、どういうわけかその女は壁を叩き始めた。一体、何をやっている？

二秒ほど叩き続け、突然。事務所の電気が点いた。

どうやら、スイッチを探していただけらしい。

「いやー、久しぶりだね。アレン」

明かりがついた中に立っていたのは、金髪の少女。どうしてだ？

「何で、俺の名前を知ってんだ？ ……何処の人間だ？」

アレンの言葉に、彼女は特に怖がる様子も無くテーブルにおいてあった写真立を手に取った。アレンの、幼い頃の写真。孤児院の仲間と、一緒に映っている。

目の前の彼女と同じ、白いコートの女の子。……誰だ？

「まさか、ユリアか？ ……よくここが分かったな、どうやって調べた？」

アレンは驚いたようにユリアと呼んだ少女に向けていた攻撃的な視線を引っ込めた。久々の、客。

それも、自分と同じ人間が来ることなど滅多にない。殺し屋でも少し、嬉しかったりする。

「いや、ボクはアレンを探してたわけじゃ……無いって言えば嘘になるかな。ボクさ、君と同じで殺し屋……やってるんだけど……」

楽しげだった彼女の表情が、一気に曇る。どうやら、個々に来た原因を話したくは無いらしい。だが、話してもらわなければこっちも状況の把握が出来ない。

「どうした？ 俺を殺せて依頼でも受けたか？」

アレンは冗談混じりにユリアに問いかける。だが、ユリアからの返事は無い。

むしろ、冗談を言う前といった後で、明らかに。ユリアの表情は曇っていた。

「……そうなんだ。ボク、君を殺せて依頼を受けたんだよ」

「んあ？ マジだったか、そうか。んあッハッハ！ 大丈夫だ、殺そうとしても返り討ちにしてやる」

アレンは楽しげに笑うと、ユリアの表情が少し楽になったような気がした。

そのまま、アレンは言葉を続けた。

「構わないぜ？ 俺は、誰にも殺されねえ。……お前も、殺すつもりはねえよ」

そんな言葉と同時だった。……殺人鬼という生き物は、敵であればどんな人間に対してであれ。非情になれるものだ。

手に握ったままだったマグナムの銃口を、一瞬の内にユリアの胸元に向けたかと思うと、発砲。赤い液体が飛び散り、ユリアの身

体は仰向けに倒れた。

「……な、殺しちゃいねえだろ？ 少し痛かったかも知れねえけどよ、俺は人を殺すつもりはねえよ」

アレンの言葉の直後、ユリアは驚いた様子で起き上がった。ユリアの胸元を紅く染めるそれは、油性マーカーのような匂いにする。ペンキではないようだが……ペイント弾？

「今日の依頼も、そうだ。結構強い麻酔仕込んだじゃいるが、殺傷力は殆どゼロだ。痛かったらごめんな」

「いつも、こうやって誤魔化してきたの？」
ユリアの問いに、アレンは楽しげに頷いた。アレンが頭を上げると同時、ユリアは目の前で。アレンの胸元に銃口を突きつけていた。

アレンの銃は、アレンの手に。つまり、この銃はユリアのもの。「悪く思わないでね、少し痛いだけだから。仕返しだよ」

発砲音。そして、銃口から立ち上る煙。確かに、死にはしないが少し痛い。

「……なんだよ、お前も……れ？ ずいぶん……強い麻酔……だ……な……」

その言葉が終わる前に、アレンはうつ伏せに床に倒れた。

「あれ？ ……実弾と間違えたかな？」

侵入者という名の自己満足（後書き）

序は数字の位

京の二つ上の位に当たる

性転換という名の自己満足

夜中、突如アレンは目を覚ました。それは、シャワールームから聞こえてくる水の音が原因というわけではない。

寝かされていたソファ横の机に『シャワー借りてるよ』という書き置きがある辺り、どうやらユリアの訪問は夢オチというわけではなさそうだ。メモを抑えていた自分の銃を引き出しにしようと頭を抱え、ソファにもう一度倒れこんだ。

床に倒れたと思ったが……よく持ち上げられたな。まあ、俺にそこまで物凄い体重があるわけではないが。むしろ、軽いくらいか？

にしても、即効性ってだけで結構弱い薬だったか？

「うゝ……気分わりい」

思わず、そんな言葉がアレンの口から漏れる。

何だ、気分が悪い。酒を飲んで酔ったような……酒なんて飲んでねえぞ？

そんなことを考えている間にも、気分の悪さから発展したのか。頭痛がアレンを襲う。が、頭を抱えることしか出来ない。そうしている間にも、痛みは頭どころか、腹部を中心に。全身が焼けるような痛みが彼を襲う。

「マジで……どんな薬仕込んでたんだよ……」

損な小さな吐き出すような言葉とともに。アレンは一瞬痙攣したかと思うと、気を失った。

「うー……」

気がつけば、どうやら痛みは引いたらしい。全く、どんな強烈な麻酔しこんでたんだ？ ああ、あの弾丸。

ソファから起き上がると、視界に違和感を感じる。そして、顔の横から降ってきた黒い。長い髪の毛。

これは……一体？

「あ、目が覚めた？」

アレンに押し掛かり、ユリアが笑顔で拳銃を向けている。

「うわあああああ！？」

……まったく、事務所の中で銃向けるの止めろよ。侵入者に銃を向けてるわけでもなければ、俺を殺そうとしてもう撃ったろ？ 殺さない所を見ると、多分、ユリアの依頼弾丸を撃ち込めだとかそんなところなのだろう。

つか、いい加減俺の上から下りろ。

「中々、可愛い服でしょ？ 私の……学校の制服」

制服？ いや、普通にコート着てるだろ？ お前……。

「いや、それコートだろ？」

ここでもうやく、アレンは自分の声の異変に気付く。明らかに、高くなっている。そして、この長い髪。

導き出される答えなど、知れている。どういう経緯でかは謎だが、現時刻を持って。殺し屋、『カフィン』は女の子になった。

と、言う事だ。

「何だよ……これ……」

戸惑うアレンに、追い討ちを掛けるかのごとく。ユリアはアレンの服を指差している。

「私の学校指定の、制服」

アレンは恐る恐る、自分の身体を見下ろした。……よく分からないが、明らかにこれはスカートなるものである。そしてここで、ユリアの方が目線の高い事に気付く。身長が百六十程度のユリアより目線が低いのは、何だかショックだ。

「……一個断っておくが、俺は服装のことを言ってるじゃねえ」

大急ぎで事務所の中を駆け抜けると、洗面所の鏡に向かう。

「……これが、俺かよ」

アレンの自分を見た第一声。透き通るような、ソプラノの通る声が、洗面所に響く。

「可愛いでしょ？」

追いかけてきたユリアの口調。そしてその表情は、明らかに何かを“知っている”と言っていた。

「お前……その顔はどうしてこうなったか分かってるだろ……」

「うん、昨日打ち込んだあの弾丸。あれね、ナノマシンで身体を最適化する効果があったんだ。まさか、女の子になるとは思わなかったよ」

ナノマシン？ また新しいのを開発したのか、あの馬鹿研究機関のイカレ学者ども！

「……最悪だ、今日は面白そうなイベントがあんのに」

先読み不能と言う名の障害（前書き）

さてさて、この辺からネギは暴走しようと思います（笑）
なにがどうなったらかうなった のノリが若干この辺から入ってくる予定

先読み不能と言う名の障害

「面白そうな……イベント？」

ユリアは不思議そうに、アレンを見た。

「ああ、詩人の幹部から、スカウトを受けた。　“うちで働かないか”って」

アレンの言葉に、ユリアも納得した様子で手に持っていた銃を腰に挿す。

「成程。確かに、カフインは殺し屋の最上位とまで言われてるからね。　ミンストレルからスカウトがあっても不思議じゃないし……今までに何度もあったんじゃないかな？」

「ああ、いままでずっと断り続けた。　今回は、条件付でオーケーしてやったけどな」

ユリアの制服の上着を脱ぐと、アレンはいつもの黒いシャツを着ようとするが、中々着れず、着るのに手こずり、腕を通してきたみものの、ダボダボでサイズが合っていない。

が、構わない様子でスカートを脱いだ直後。　彼は。　いや、

彼女は赤面した。

自分の穿いていた物をみて、絶句する。

「可愛いショーツでしょ？」

黙っている彼女に、ユリアが言い放つ。

「何着せてんだ、俺はお前の着せ替え人形じゃねえぞ!？」

「いやーん。　怒らないでよ、怒っても可愛いだけで怖くないけど。　安心してよ、その辺のコンビニで買ってきたものだから」

く……クソ……。　完全に、舐めきってんな、ユリア。

再起動してショーツを脱ぎ捨てると、いつも何時も通り。　自分の着ている服装で、黒いコートを羽織るが中々どうしてこう様にならないのか。

男の時との身長差が十センチ以上あるため、明らかに変だ。

鏡を見て、アレンは思わず黙り込んだ。そして、数秒の空白の後、口を開く。

「なあ、これ戻せないのか……?」

悲痛な、一言。それに対し、ユリアは笑顔を向ける。

「戻せるよ」

予想外の答え。

「ナノマシンを、もう一度打ち込めば良い。ただ、撃ち込んだ時と同じで痛いけど良いの?」

ユリアの言葉に、アレンの表情が一気に晴れる。

「痛みは、耐えればいいだろ? 戻してくれよ」

アレンの答えを聞いて、ユリアは携帯電話でどこかにメールを送る。

「一応、確認とおかないといけないから少し待って」

そして、その十分後。ユリアの携帯の着信音の後、ユリアは無言でアレンに頭を下げた。

「ごめん、無理だった」

予想外の答え。

「戻せるんじゃないかったのかよ!??」

アレンが半ば叫ぶ。が、怯むことなく、

「戻せるように造ってあったはずだったんだよ。けど、打ち込まれた後もナノマシンは増えながら進化を続けちゃうから。ボクたち人間の予測と頭脳じゃ、どう進化したのを破壊するか。先読みして破壊するのは無理なんだって。それに、もう一度打ち込んで戻そうとした被検体が全滅したって報告書まで画像添付してきてる」

ユリアの言葉に、再びアレンは落ち込んだ様子で事務所のソファに腰掛けると、引き出しに夜の内にしまっていた拳銃を取り出すと、腰に差し込んだ。

「……まあ、仕方ないな。死ぬモンじゃねえし、何より、詩人の連中を待たせると後が面倒だ」

先読み不能と言う名の障害（後書き）

M i n s t r e l

ミンストレル

直訳で吟遊詩人

認識不可能という名の障害

コートのサイズなど気に留めることなく、アレンはバイクにまたがった。そして、アクセルを靴のつま先で蹴飛ばした。バイクだけは、特注だ。

手元にブレーキを付けておいて、今は良かったと思う。

今の身長では、どうしても足のつま先でしかアクセルに届かない。身長が十センチ低いで、ここまでの落差が出るものなのか。アクセルを蹴った足で、バイクの側面に引っ掛けた合ったヘルメットを蹴り上げ、右手で手に取るとそれを被る。が、髪の毛が邪魔だ。

「髪、切ってくりゃ良かったか……？」

事務所には、ユリアを残している。基本的に、あの事務所に隠すものなど無い。アレンが男でも、いかがわしい写真集がベッドの下にあるわけではない。あるとしても、二階の壁や一階の台所の床を叩くと板が回転して出てくる拳銃コレクションしかない。他にあるとしても、兎のホルマリン漬けや、ハツカネズミの剥製など。全くわけの分からないガラクタしか見つからないだろう。

信号で止まると、アレンはヘルメットを取り、視界にチラホラ入り込んでくる長い髪をその中に入れなおす。信号が青に変わると同時に、アクセルを蹴飛ばすと速度を上げた。

風を切り、ビル群の中を切り裂くように疾走する。しばらく走り続けると、ようやく。指定された場所へと到着した。

場所は、とある廃墟。調べた情報によると、一週間後から解体工事が始まるらしい。その、地下駐車場で、待つとのことだ。

その日のうち、正午以降であれば時間の指定は無い。ただ、深夜十二時を過ぎた時点でこなければ、話しは無かった事になるらしい。

詩人という規模の知れない巨大な組織は、アレンのような裏の人

間には魅力である。秩序維持を盾に、堂々と仕事を行える。が、場合によって。

今回のように呼び出された後に、待ち伏せにあって死ぬ場合も多いらしい。

「さて、鬼が出るか……蛇が出るか」

アレンは平然と金網を突き破り、駐車場に乗り入れると地下への通路を突っ切った。灯がある辺り、誰か人間が居る。

バイクのエンジンを切ると、地下駐車場のど真ん中で、アレンは待った。ヘルメットを被ったまま、堂々と直立している。

撃つのであれば、良いのだ。だが、殺される程度のリスクは、アレンにとっては特に大きなものでもない。このまま、アレンを殺すつもりならば。詩人の連中は躊躇無く、このビルを解体爆破するだろう。だが、駐車場に入り込んで五分経つが、一向に爆破する気配が無い。

それどころか、人の気配一つしない。と、感じていた。

だが、それは思わぬ所から最初から、アレンの目の前に居た。

「君が、カフィン？」

第一声。目の前で、無尽の空間から聞こえる声。だが、そこに人は……居た。いつの間に？

「ああ、そうだ。お前……いつからそこに？」

「君が……来る五分钟前から。君が、僕の存在を景色としてしか認識できないのは、僕の生まれつきだね。……おっと、自己紹介をすべきだったね」

白髪の男は、その死んだような瞳でアレンを見た。だが、実際はアレンと目を合わせないように必死だ。彼の瞳に仕込まれたカラーコンタクトがアレンを注視し、実際の眼球はあさっての方向を向いている。

「僕は、音無^{おとなし むおん}。ミンストレルの、戦闘部隊、蜘蛛の隊長を務めているんだ。ああ、出来れば僕をそんなに見ないでくれ。

僕は、人と接するのが苦手なんだ。昔、友達だと思っていた人にタバスコジュースを飲まされてね。それ以降、僕は人を信じていないんだ」

彼はアレンと目を合わせないように、ついには真横を向いてしまう。何だ、この奇妙な面白人間は……。

「お前の情報はどうでも良い。どういうトリックだ、俺の視界に居ただと？」

変声機を通したアレンの言葉に、呆れたように無音はため息をついた。恐らく、アレンの考えている事。そして、隠している事を見抜いている様子で。

「僕の、能力だ。インビジブルサイン不可視の標識、が、僕の生まれつきの力でね。僕から接触しなければ、僕は景色にしか見えない。君だって、そうだろう？ カフィンって“黒ノ棺事件”から活動しだししたし。

ちなみに、僕的能力レベルはマイナス？だよ。危険度はSSクラスオーバーだけどね。目を合わせたくないのもそれなんだ。能力者の中に目が合っただけで僕を殺せる能力があるかもしれないし、何より君がそうかもしれないだろう」

無音の言葉に、アレンは驚いた様子で。そして、不敵な笑みを浮かべる。

「そうか。で、俺の姿は分かっているのか？」

「ああ、写真もあるぞ」

無音はポケットを探ると、アレンに投げ渡した。今、明らかに写真からも目を逸らしたろ……。

無音の持っていた写真は、男。そして、今のアレンは……女だ。「名前は割れてるのか？」

アレンの言葉に、今度は違うポケットから無音は手帳を取り出すと赤い付箋のページを開き、軽く息を吸い込んだ。そしてそれをゆっくりと読み上げる。

「アレン・ブラックウッド。分かっているのは名前だけじゃない。

フィオ・シュレーディングアの孤児院出身。その孤児院の火事と同時に、黒ノ棺事件同様。棺に詰め込まれた盗賊が蒸し焼きにされていたのが、君である決定的証拠かな」

若干、面倒くさそうに手帳に貼った新聞の切抜きをアレンに提示する。

「僕は人間の顔見たくないんだけどさ。確認義務があるんだ、そのヘルメット……いい加減とってよ」

無音の言葉に、一瞬アレンが硬直する。

「……多分、その写真と姿は違うぞ？ いや、違うな」

「別人であれば、殺せと言われてきてる。別人とか、影武者なら……今の内に逃げることをお勧めする。けど、逃がすつもりも無いかな」

腰の鞆に突き刺さっていたナイフを手にとると、無音はアレンに対して構える。が、アレンは動じる様子もなく、躊躇することなくそのヘルメットを脱ぎ捨てた。

コンクリートの地面に、ヘルメットがぶつかる音と同時に。その場の静寂を切り裂くように、金属同士の衝突音が闇に響く！

衝突音の直後。長い黒髪を散らし、アレンは音無の握ったナイフを避ける。避けた直後、銃のグリップを音無に叩きつけると、音無はそれを握り、力任せに引いた。その弾みに、アレンは音無と目が合った。アレンの攻撃的な青い瞳と、音無の死んだような蒼い瞳が合った。

直後、音無はそっぽを向くと、距離を設けてカラーコンタクトを捨てた。

今度は堂々と、アレンを見据える。

「へえ、ずいぶん可愛らしいね。影武者かい？ 僕を……見るなよ！」

突然だった。突如狂ったように、おびえた様子で。無音はその刃を振りかざす！ が、それをアレンは銃の背でいなし、無音の頭に。その銃口を突きつける。

「引き金引けば、お前は死ぬぜ？」
威嚇するように。その鋭い視線が、言葉が、無音に突き刺さった。

「引けばいいじゃないか。僕は、この世の中を呪いながら死ぬだけだ。何でも良い、僕を見るな」

無音もまた自分同様、死を恐れない人間か……。悲しいな、こういう人間を見るのは。

「いや、殺せねえ。撃たれてみるか？ この銃で撃たれても、五時間くらい寝るだけだ」

アレンが銃の撃鉄を引くと、音無しは諦めたように態度まで大人しくなった。

「……君は眼を合わせても殺す力はないんだね。……表に、僕が呼んだ車が来る頃だ。それに乗るか、バイクで付いて来てくれればいいよ。君は、カフィンの偽者だとしてもスカウトするに値するほど強い」

音無の言葉が終わると同時。駐車場の出入り口からクラクシヨンの音が、コンクリートの壁に響く。

「ああ、これだよ」

認識不可能という名の障害（後書き）

音無君登場♪

次は童子を出したい所だけど、キャラの関係上出せないという悲劇が

そうだな、天才だったし

ナノマシンの開発者で出そうかな……？

§ネギの気まぐれ解説§

能力者レベルは、能力者の魔力の含有量

危険度は、その能力そのものの危険性

能力者レベルが高ければ、その分能力の発動時間が長く

危険度が高ければ、その能力を悪用した場合の被害が大きい。

能力者レベルに差があろうとも？である能力者と？の能力者が戦ったとして

レベルではなくレベル上位者以上に危険度が高ければレベル？がまず、勝つことになる

人間で現在確認されている能力者のレベルは、マイナス？〜？。ゼロも存在

危険度はF〜SSまで

後に、作中でこのことは少し触れる予定

仕事の質問という名の壁

無音の指示で、黒いコートの大柄で強面の部下達がテキパキと仕事をこなす。騒ぎによって通報を受けて来た警官を誤魔化し、アレンのバイクをその黒い車の後ろに括り付け、そして手の空いている者が“カフィン嬢”をエスコートするわけだが。

“カフィン嬢”は前二つは良いとして、後の一つ。エスコートというものが気に入らず、むくれている。

「なあ、無音。俺は、今どんな扱いなんだ？」

思わず、無音に問いかけるも、無音は指示出しに忙しいらしい。こちらの質問に答える気配すら見せなかった。仕方なく、真横まで歩み寄り、

「おーい、俺の今の扱いはどうなってんだ？ 危険人物か？」

耳に直接、その言葉を流し込む。

途端、驚いたように無音はアレンから遠ざかった。

「ああ、君の扱いは丁重にとって指示してる。けど、彼らが何かしたかい？ 十分もしたら、僕たちは拠点へ行って、ボスに君の事を報告させてもらう。で、運が悪ければ君は死ぬかも。ケド、僕は、守ってあげるから安心してくれていいよ」

真赤な顔で、アレンに返す。　　どういうわけか、やはり顔を合わせようとはしない。

視線が合っても、死なないって分かったろ？ 何でまだ、視線を逸らすのかね。

「カフィン嬢、こちらへ」

部下の一人が、車の戸を開きスタンバイしているわけだが。アレンはそれに対し、不機嫌な様子で『アリガト』と小さく呟くと警戒することなく車の中に乗り込んだ。

「さて、吟遊詩人^{ミンストレル}第二支部へ向かってくれ。新人の戦力テストをする必要がある」

いつの間にか車に乗り込んでいた無音は、運転席の部下に指示出しを続ける。　どうやら、人と接するのが苦手と言っていたわりには、カリスマ性があるらしい。

その間に、部下の一人がアレンに紅茶を勧めてきた。　どうやら、無音の気遣いらしい。

的確な指示を、順序良く出すのは中々、人間嫌いや自閉症の人間にできる事ではない。

「さて、アレンだったよね？　僕の質問に、答えてもらうよ」

車が走り出すと、無音は再びさっきの手帳を開くとそのページに記されていた質問文を読み上げる。

「質問その一。　君の能力は？　恐らく、君がこの間襲撃した兵器会社のパーティー会場に残されていた黒い塊と関係があるんだろ？」

思わず、アレンはいましたがた勧められた紅茶を噴出しそうになった。

いきなり、能力者の。　殺し屋のトップシークレットである能力について、聞くか？　まあ、この場合は答えるべきだが。

「能力名は黒^{ブラック}ノ棺^{カフィン}。　対象の持つ物質エネルギーをそのまま利用して、俺にもよく分からん黒い塊にする力だ。　固まりになった直後、運動エネルギーは消えるからな。　カフィンの襲った所に時々落ちてた黒いビー玉は塊にされた弾が縮小したものだ。　大きさによるが、金属だったら能力発動から数秒で百分の一以下に縮小するからな。　恐らく、ビー玉大だったら大型の対戦車用の大砲だろ」

彼女の言葉に、無音は驚いたような表情で彼女を見つめる。　彼女が無音の方に疑問符を浮かべつつ顔を向けると、無音は顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。　そして、手帳に走り書きを残すと再び口を開く。

「質問その二。　能力者レベルと、危険度ランクは？」

無音の言葉に、アレンは微笑した。

「能力者レベルはゼロ。　危険度はSS。　俺は、魔力なんて持

ってねえよ」

アレンの述べた数値を、無音は再び手帳に書き込む。

「へー、君はレベルゼロなんだ。道理で、話しかけるだけで僕に気付いたわけだ。皆、僕が触れないと気付かないのに」

ポケットを漁ると、無音は更にマーカーを取り出し、レベルゼロという部位に伏線を引いた。

「最後の質問。 彼氏は居る？」

アレンは思わず、その質問に言葉を失った。 これは……

「まさかとは思うが、お前個人の興味本位とか……無いよな？」
アレンの言葉に、無音が一瞬反応したような気がした。

「え？ 違うって、違うよ。 僕の興味本位のわけないじゃないか、仕事だし！ へー、僕が君に恋愛感情を？ あるわけないだろう？ 君は、書類上男なんだから！ 第一、僕より強い阿婆擦れさんに、僕が興味を持つわけが……」

直後、慌てふためいた様に無音は弁解を始めた。 さっきから、どうもこの男の思考は読めない。

「……どうでもいい質問だな。 これは答えるべきか？」

「……どうしても嫌なら、答える義務は無いよ」

どうにも、この様子は仕事上の質問とは思えないが、仕方ないな。

「誰も……好きになったことが無いな。 言われてみれば、仲が良かったのはユリアだけだ」

アレンの言葉が終わる頃、窓の外から。 大きなビルが近づいてきた。

自己流という名の壁

しばらくして、車はその太陽を飲み込むような。大きなビルの駐車場へと入った。

見れば見るほど、そのビルは大きい。そして、奇妙な見覚えと地面の所々に点々と落ちている空葉莢。そして、バイクが走り去ったようなタイヤ痕。

アレンの頭の中で、三秒間。この場所に関する記憶の検索が行われ、結果。ここは、昨日襲撃したビルだということが判明した。上を見上げれば、十二階に当たるフロアの窓の修理工事が行われている。昨日、あそこから飛び降りたのは言わずとも。着地のとき、少し足が痛かったつけ？

「……そうか。昨日の依頼、詩人のテストを兼ねてたのか？」アレンの言葉に、無音が驚いたような表情を向ける。

「あれ、場所分かんない様に回り道しまくったんだけどな。まあいいよ、後々分かる事だし。今気付いちゃっても」

それを気にした事もない様子で。入り口を通過すると無音は自分のことに気が付いていない受付の頬を突いた。中々の美人なのだが、お構いなし。

受付の彼女は、無音に気付くと、彼に銀色の鍵を手渡した。どうやら、俺のことは既に伝わっているらしい。

「で……テストとか言ってたな」

「ああ、言ったよ。何をするかって？ 簡単さ。銃とナイフを持って模擬戦闘を行ってもらおう」

無音に言われるがまま、迷路のような通路を付いていく。途中、大きな体育館のようなフロアを通過する際。飛んできたバスケットボールを蹴り返し、アレンはそれをゴールポストに叩き込んで見せた。

「自己流？ 強いね」

無音はそれを見て面白そうに笑っている。

「さて、到着」

連れてこられた先。それは、ワンフロアの中にボクシングのリングのようなフィールドが無数に設置されたトレーニングルームのような。ただ、よく見ると壁に血痕などがある辺り。そんなスポーツを行うところではないらしい。

「さて、少し待ってて。人呼んで来るから」

その言葉の直後。無音の姿が、アレンの視界から消える。

甘く見ていた。姿を認識できないだけとはいえ、ここまで強力なものは殆ど無い。相手に認識されないのであれば、近づいて急にナイフを差し込むだけで。

ただ、近づいてナイフで刺殺可能なのだ。相手に気付かれなければ、ほぼ確実に一撃で葬れる。

「さて、お待たせ」

案外、時間は掛からなかった。待ったとしても一分も無い。

無音と、もう一人。

黒髪の男が、サングラス越しにアレンを見つめている。

「お前が、“カフィン”か。中々、可愛い姿をしているんだな、殺人鬼。俺は、ルイス・オールディントンだ。音無と同じで、遊撃部隊“蝸”の隊長を務めてる」

「さて、テストは簡単だよ。僕がいつて言うまで戦えばいい。怪我させても言いし、怪我させられる事もあるだろうし。下手すれば、死ぬから。で、ステージはあれにしようかな？」

無音が、フロアのだ真ん中を陣取っている金網のリングを指差し嬉々として言った。どうやら、逃げ場は無い。そして、こちらにとっての利点は無いらしいが、どうやらルイスの反応からしてルイスの嫌いなフィールドらしい。

少し、こっちが有利か？

「じゃー、ルール聞いたところで。早速だけど、始めっぞ」

無音から銃とナイフを受け取り、アレンが金網の中に踏み込むと

同時に金網が閉じた。上下左右、逃げ場は無い。続いてルイスが、アレンの正面の入り口からリングへ入る。同じように、金網が閉じた。

「じゃ、スタート。能力の使用はありだよ」

無音の言葉に、早速、ルイスは能力を発動させたらしい。手の甲に刻まれた歯車の刺青が、音を立てて回転する。

「じゃあ、お前が女ってことで一つハンデをやる。俺の能力は、身体能力の強化だ」

「しらねーよ」

ルイスの言葉を聞き流し、アレンは『パァン』というラップ音とともに、ルイスを力任せに蹴り飛ばす！ が、ルイスはそれを左手で受け止めると、それを引いてアレンを……壁に叩きつける！

「自己流の体術か？ 結構、自己流ってのは聞こえがいいだけで……弱いぞ」

自己流という名の壁（後書き）

どうやら、予約掲載の時間を間違えていたようです
本当は、零時に掲載したかったのですが

私の手違いで十一月ではなく十二月の二十四日になっていました
リア充……まあ、早くなりたいかも（笑）な今日この頃です

超高速という名の壁

アレンは投げ飛ばされた先の金網を蹴り飛ばし、加速する。そのまま、空中で蹴りを繰り返すも、ルイスはそれを片手で容易く受け止める！

「こりゃ、驚いた。ここまで強い我流体術は始めてみた。が、甘すぎるぜ？」

彼の一言。そして、浮き上がる体の感覚。上に……投げ上げられた！？ まずい、受身が取れない。

「空中ほど、避けるのに適してねえとこはねえよな！」

恐ろしい速さで、ルイスの拳が落下するアレンめがけて突き出される！ 空を切り、タイミングも完璧だった。

これを受ければ、ほぼ確実に骨が折れる。何より、男のときよりもこの体……脆い！

「いや、案外……」

アレンは頭から落ちることを選択すると、ルイスはいい的だと思ったのか。アレンの顔面めがけ、鼓舞しろ叩き込む！ が、アレンのほうが一瞬早かった。

叩きこまれた拳を、受け止めると、その腕の上で倒立。体を倒し、ルイスを地面に叩きつける！

「避けられなくもない。つーか、女相手に手加減ねえのな」

「男って、聞いてたからな。俺も嫌なんだが……仕事なモンでね。人情とかなんて、言ってるんねんだ。間違った正義も、群れれば正義だ」

ルイスの言葉の直後アレンが爆発音とともに列音とともに床に足形が残るのではないかと思うような勢いで、床を蹴り飛ばしてルイスめがけて突進する。床を蹴り飛ばした後には、あの黒い塊が。

アレンの速さは、異常だった。人間である以上、超えられない力の壁を突き抜けたような。

人間が走った場合。瞬間的に出る最高速度は時速五十キロがい
い所らしい。だが、アレンの身のこなしはそれを遥かに凌ぐ。

文字通り、目にも留まらぬ速さで、ルイスにその細い腕を振るうと、
拳を顔面目掛けて打ち付ける！

「つてえ……。 ……何をしでかした？ お前の力は、黒^{ブラック}ノ棺^{カフィン}
だろ？」

「生憎、こっちが本当の使い方だよ。今の言葉を吐いた奴は：
…ペイント弾は使わねえって決めてんだ」

静かにゆつくりと。まるで、先日の襲撃時に見せたあの威圧同
様の殺気を漲らせ、ルイスを威圧する。

「じゃ、何を使うんだ？ その化け物みてえなスピードか？」

「いいや、実弾を使わせてもらってる」

その手に握る銃のグリップをその小さな手で握るとアレンは撃鉄
を引いた。大きな銃に小さな手をめいっばい広げ、それを握り締
める。

その開き切った瞳孔と狂気表情は見る者に畏怖の念を植えつけ
る。視線の先に居るルイスですら、それなりの数の死線を超えて
いる人間だったのだろう。自分に対するこの圧倒的威圧が信じら
れない様子で。動く事を忘れて立ち尽くす。

「へ……。へえ。で、俺を撃ち抜くわけだ」

アレンの答えより先に、発砲の爆発音がビル内を駆け巡る！ そ
の細かな振動に、リングの金網の上に積もった埃が舞った。

「さアな？ いつも通り、確かに撃ったぞ」

ルイスの額を、アレンの放った弾丸が捕らえた。弾丸は額に着
弾し、吹き出す血に、アレンの満足げな表情。

それは見るものに不快感を与えるような。強烈な負の思念を剥
き出しにしていた。

「……。で、無音だったっけ？ これで、良いか？」

握っていた銃を金網越しに無音に投げ渡すと、前のめりに倒れた
ルイスに背を向けた。背を向けてしばらくして、彼は額にこびり

ついた紅い液体をポケットから取り出したタオルで拭った。

「……くっせ。 何だ、この臭い？ 鉄か？」

「錆びた鉄粉を少々、混ぜ込んでる。 死の偽装工作だ。 で、もう一度聞くが、これでいいのか？ 無音」

アレンの問いに、無音は黙って頷くと金網を持ち上げた。 二人がリングから出たことを確認し、鍵をかける。

「……結果が出た。 カフィンの戦闘に関する総合技能。 パワーはS、スタミナはB、スピードはSSオーバー。 技能に関しても、SSオーバーだった。 で、これをボスに報告してくるわけだが。 その間、このビル内で待機していて欲しい。 そうだな、ルイス」

「何だ？」

「三階に良い喫茶店があっただろ？ 彼女にデートを申し込んでみたらどうだい？」

無音の言葉に、思わずアレンは絶句した。

男とデート？ 冗談じゃない。

「そうだな」

「俺が断る。 勘弁しろよ、俺はこの身体になってまだ一日も経ってないんだぜ？」

アレンの言葉に、ルイスは興味ありげに。 不信感を抱いた様子でアレンを見つめた。

「そうだな、可愛い色白の黒髪美人になって一日経ってないって、どういうことだ？」

ルイスの問いに、アレンは不満げに口を開いた。

「殺し屋“カフィン”は昨日の夜に事務所に侵入した別の殺し屋が打ち込んだナノマシンによって、この姿になったってことだ」

超高速という名の壁（後書き）

今回より、五日間

更新はお休みさせていただきます

と、休み報告のかなり不確かなネギが言っていますが
今日明日の更新の可能性は中々高いです（笑）

ただ、更新したとしてもしなかったとしても

三日後に、私が今までやってみたかったことを仕出かしますので
まあ、やらかしても温かい目で見ていただけると幸いです

見た目という名の壁

「一体……どういうことだい？」

ルイスを見ないよう、そっぽを向いた無音が、アレンを問い詰める。だが、アレンの言葉以上に、今現在の彼の状態を簡潔に表せる言葉は無い。

「昨日、懐かしい友人が事務所を訪ねてきて、俺とじゃれた時に、ナノマシンを打ち込まれた」

アレンの説明に、相変わらずルイスは疑問符を浮かべている。

「つまり、ナノマシンでその姿になった……ということか？」

「ああ、そうだ」

「元は、この写真の姿で間違いないのか？」

ルイスは、無音のポケットから写真を引き抜くと、アレンに提示。アレンは黙って頷いた。

「つまり、元は男……ってことか？」

「ああ、そうだ」

「ナノマシンは、どうするんだ？ 変身をキャンセルさせて破壊できないのか？」

興味本位。そして、半ば真面目に聞いてくるルイスに、アレンは携帯電話の画面を突きつける。

“ 新型ナノマシン【クレクトリプレイ】に関する実験結果 ”

そんな見出しの下に、検体名と死亡日時。そして最後のはまめまで。しっかりと記された研究レポートが、アレンの携帯電話の画面にはキッチリカッチリと表示されているわけで。

無音は元より、ルイスは言葉を失った。

「な、男とデート……だろ？」

アレンの言葉が、ルイスに耳に入ると同時。ルイスは気が付いたようにアレンを見つめた。そして……

「ま、何でもいいのか。戻せないなら、今後どうするか考えると

しよう。無音、身体計測を手配してくれ。もちろん、計測対象は女性な」

「分かった、任せてくれたまえ」

あさつての方向を向いたまま、無音はルイスに言葉を返す。

「なッ……待て待て待て！」

二人の進んでいく会話に、アレンはここでようやく取り残されている事に気が付いたらしい。相当慌てた様子で、二人の間に割って入る。

「俺は、いい！ 身体計測は止めろ、女向けてことは女がやるってこったろ？」

「ああ、そういうことになる。お前だって男の目の前で脱ぐのは恥ずいだろ？」

猛反発するアレンに、ルイスはなだめるように言い放つ。

「ああ、その方がな！」

ただ、ルイスに気遣いも無意味に終わった。

「あのな、大体その格好で裸になるんだぞ？ 分かってんのか？」

「ああ、んなことは百も承知だ！」

「悪いが、ボスに報告して来ていいか？ 時間が詰まってる」

大声でとなるアレンと、それをなだめるルイスの間を横切って。

二人に気付かれる事なく無音はその場から消えた。無音は初めて、気まずいこの場からいとも容易く脱出させてくれたこの能力に感謝したかもしれない。

見た目という名の壁（後書き）

さてさて、予告通り

これを手始めに

本日は二時間置きの予約更新をやろうかと思っています

『ネギの気まぐれ更新』タグ、つけておいて良かったと今はじめて
思いました（笑）

実際、一時間おき更新がやりたかったのですが、テストという壁が
……orz

毒蜘蛛という名の罠

『中々、面白い人材を見つけたものだ。 無音』

ミンストレル

携帯電話越しに、無音の話す相手。それが、この吟遊詩人のボスであり、変声機を通している辺り。男性化女性化の判別も出来ていない。謎の塊であり、その所在する、一部の幹部にしか知らされてない。

ただ、中には背景に流れる音を聞き分けて位置を特定したというキレ者もいるわけだが。それは一人しか居ない。

「ええ、中々面白いだけではありませんでしたよ。戦闘能力も中々のもので、総合評価がSクラスの上位。能力の幅は未知数ですが、ご報告申し上げた事柄だけで。どうやら“彼”の考えている以上に。あの“黒い物体”には奇妙な力があるようなのですが。どうも、小さく縮小されたものは直ぐに風化してしまうようです。現在収拾に手間取っている所です」

携帯電話を握る手とは逆の手に、握られたビン。その中には、アレンの能力で発生したあの“黒ノ棺”の欠片がそこに少しだけ溜まっていた。

「どうやら、この物質。いわゆる暗黒物質ダークマターのようでして、恐らくは。後にサンプルをお送りいたしますが、輸送の途中で風化する可能性もございますので。その時は、悪しからず」

電話を切ると、無音は小さくため息をついた。ビンの中に溜まっている物体に目をやり、

「……オリハルコンか」

小さく呟いた。

「嫌だ！ ふざけんなその服装じゃ可愛くないって言っただけだろ？」

無音が二人のいるであろう食堂に向かうと、そこに二人は居なか

った。実際にいたのは、食堂の横。呉服店。

「何でメイド服なんだよ！ スカートも駄目だ、無い！」

「そんな釣れないこと言わないで。ほら、このスカートとかどうかしら？」

ルイスと、店員が一緒になってアレンに“女物の洋服”を勧めていた。それを見た無音は呆れたようにため息をつく。

一体、何をそんなに大騒ぎしているのだから。

「二人とも、一応連絡入れてきたぞ」

無音の言葉に、アレンだけが反応する。だが、ルイスと店員は一切反応せず、スルー。それに対し、無音はルイスに脛を蹴り飛ばすと耳元でポケットから取り出した笛を目いっぱい息を吸った後、吹いた。

「んぎゃあああ？ ……なんだ、無音か。驚かすなよ、普通に呼べば気付くっての」

「呼んでも気付かなかったから、こうして笛を吹いたわけだが。アレンの加入を正式に許可するってよ。事情話したら直ぐにその研究施設に連絡入れて確認取ってくれた。で、アレンの今後についてなんだが……」

今から初任務とか？ なんて、目を輝かせるアレンに対し、手帳を開いた無音の第一声。

「服装は女物を着用。私服も同様とする」

任務などとは全く関係の無い、身だしなみからかよ……。一体、この組織のボスは何を考えてるんだ？

「ふざけるなああア！」

「二つ目に、君が提示した条件に関して。“事務所”の管理は、原則“カフェイン”に任せるものとする。そして、こちらからは一切関与しないものとする」

無音の言葉に、若干服装に関する項目の怒りを残しつつも、当たり前だといったように頷いた。

「三つ目に事務所出入りの際。こちらがつける部下を“父親”

または“母親”として、一名そばに置くこと。そして、事務所はつい最近不動産より買い取ったものと工作すること」

「まー、そのくらいなら……。ただ、親は勘弁しろよ。俺は一応成人してんだぞ？」

アレンの言葉に、横でルイスが驚いた様子で口をあけている。

「何だよ？」

「いや、まだ十六か十七くらいだと思ってたぞ」

ルイスの言葉の直後。問答無用で、彼の顔面にアレンの拳が叩き込まれる！ が、ルイスはそれを平然と避けた。それに対する、アレンの舌打ちを気にする様子も無く。

「四つ目」

「まだあるのか!？」

無音は無言で頷く。

「四つ目。本日を持って“カフィン”を正式に戦闘部隊【バルベロ】の十五人隊長とする」

無音の言葉に、アレンが固まった。アレンがフリーズしたのを、どうやらルイスは理解したようだが。無音には理解できなかったらしい。

疑問符を浮かべて、アレンの顔を覗き込んだ。

「どうかしたか？」

「……組織加入して即隊長格かよ」

「ああ、そうだ。がんばれよ、たまに僕が遊びに行くから」
むんのこと場が終わると同時。アレンの視線が、とある人物一人に絞られた。

「お話は終わったかしら？」

そう。呉服店の、店員である。

それを見た無音の口元が、半ば満足げに笑ったのを、アレンは見たような気がした。

女性部隊という名の罠

言われたように。嫌々、仕方なく、どうしようもなく、店員に逆らう気も起きず。

アレンは女物の制服に身を包み、案内され、通された部屋の椅子に座っていた。

部屋の中には、小物や雑貨などが所狭しと並べられ、真ん中には会議室にある机といえば誰もが思い浮かべるであろう形状の机が、陣取っていた。部屋の四隅を見れば、柱を覆いつくさんといった勢いで。無数の大きなぬいぐるみが大山を形成している。

雑貨が置いてある辺り、隊員は恐らく殆どが女。流石に男が、こんな可愛らしいクマさんのキーホルダーや、猫の置物を置いて回ったりなどしないだろう。部屋の隅のぬいぐるみに関しても、男は殆どいないと思わせる。

「おはようございまーす」

元気のいい挨拶。扉の開く音。その挨拶、多分間違ってる。

もう、昼過ぎ。言うのであればこんにちはだ。

長い髪の、元気のいい女が、アレンの目の前を通過する。当然の事、彼女はアレンの存在を認識したわけだが。

「れ？ 何、この可愛い子！ あーん、こんな可愛いのに制服なんてもったいない！ 今すぐ可愛いお洋服を……」

「黙れ、殺すぞ」

部屋へ入ってきた彼女は、アレンの冷え切った声に恐れをなした様子で。部屋の隅で人形に埋もれて休眠モードへと移行した。

「ねーえ、君誰？」

不意に、アレンの耳に彼女の小さな声が迷い込んだ。

「「カフェイン」だ。今日付けで、【バルベロ】の十五人隊長を任された」

一瞬の沈黙。何か、まずいことを言ったか？

「……隊長が今日変わるって言ってたけど。まさか……カフィンってあの？」

「ああ、そうだ。で、俺は……」

アレンの言葉が終わるか否か。そのタイミングで、彼女はぬいぐるみを吹き飛ばし、アレンに駆け寄った。

「あのカフィン？　ねえ、能力！　君の能力は？」

この女……。一体、何がしたいんだよ？

「俺の能力は、そのまま黒ノ棺だ。ブラックカフィンで、さっきから。お前一体なんだよ？　大体、俺が殺すつつって今までに話しかけてきた奴居なかったぞ」

呆れた様子で、彼女に対してアレンは言い放つ。が、彼女はそんな言葉などお構いナシだ。

「そうだな、お前は一体……何だ？」

「酷いなく。私はこの隊の副隊長さん。ソニアって言うんだ、ヨロシク」

握手を求める彼女の手に、触れる直前。アレンはソニアの手にある指輪に目が行った。黒い金属で出来た、指輪なのだが。内側に、日本の小さな棘が生えている。

「……で、その棘にはどんな毒があるんだ？」

アレンの問いに、ソニアは面白くない様子で

「ちえー、気付いちちゃったか。よくやるんだ、神経毒。刺されれば一時間は夢の中。その間私が好き勝手するって算段だったのに」

ふざけんなよ？

「勘弁してくれ、俺は疲れてんだ」

面識無しという名の罠

正直、俺は女と話す経験など殆ど無い。　というよりも、人と話した記憶が少ない。

事務所に来る依頼人であれば、必要最低限。　会話をするのだが、それも用件だけであり、いざ会話で話題を振られるとどうすればいいのやら。

それも、自分任せとなるととても困る。

「……そうだな、この隊のほかの連中は？　【バルベロ】は通常は何を行う部隊だ？」

アレンの問いは、どうしても仕事方向に向く。　が、どうやら個々での会話はそれの方がいいかもしれない。　個人経営の事務所であれば、他人との関係を持つ事などない。

だが、部下を持つとなれば部下の事は知っておく必要がある。

「さあ？　私も、会ったことがあるのはレイラとミクとクオードだけだから。　分からないよ、そんな全員の名前なんて」

予想外の答え。　まさか、副隊長を勤める人間が隊の一部としか面識を持っていない？　いいのか、そんなことで。

場合によっては、前の隊長が相当しっかりしていて、副隊長はただの飾りだったという憶測も可能なわけだが。　どうも、そんな風には思えない。

実際、部下をもったことの無い単独任務を行っていたアレンを隊長にしたくらいだ。　カリスマ性などは皆無であり、人の上に建つような人間ではない。

「……いいのか、それで」

「良いんだよ、これで。　【バルベロ】のメンバーは基本的に単体で。　場合によっては二人組みで世界各国で任務を遂行する。」

【バルベロ】は独立戦闘組織だから、これで問題は無いわ」

成程。　ほぼ個人で任務を遂行する部隊……俺が配属された理由

が何となく分かった気がする。確かに、他にいれば足手まといだからな。

これでよったのだろう。

「で、基本的な任務の内容はどんなが多い？」

アレンの続けざまの問いに、面白くない様子でソニアは説明を続ける。

「基本、派遣で他部隊の即戦力が多いかな。私は前に知恵戦争ウイズデムの独立戦闘部隊の指揮を任されたこともあるし、結構ハードなのが多いわ。ただ、前隊長はもっと過酷な任務に当たってたわね。

確か、天使の討伐とか、言ってたけど。私には内容を教えてくれなかったな」

天使の討伐……ねえ。中々、妄想チックな任務だな。

呆れた様子で、アレンはぬいぐるみの山の中に見つけた自動販売機でミルクティーを購入。蓋を開けるとボトルを咥えた。

「で、今日はどうしてここに？」

「新隊長を知っておけて言う上からの命令よ。で、無音君から聞いたと思うけど……お母さん役の部下。あれが、どうも私になるみたいなのよね」

ソニアの言葉に、アレンは飲んでいたミルクティーを盛大に吹き出した。まさか、あの部下の話も本気だったのか。

「本気で言ってるのか？」

呆れた様子で、アレンはソニアを見据える。が、ソニアは結構まじめといった表情だ。

「ええ、そうよ」

いやいやいや、無理があるだろ。

「何で、俺の母親役がそんな若いんだよ？ 変だろ、お前。二十代の人間に、二十代の息子の親役が務まるわけねえって」

笑い混じりに、ソニアに対して言い放つ。

「そうよねー。そこは同意するんだけど、息子って？ 娘の間違いじゃないかしら？」

「……男に向かって娘とか言うな。虫唾が走る」

いじけたように、アレンは椅子の上で小さく丸くなった。それを見て、ソニアは今すぐにでも襲い掛かりたいといった様子で、その衝動をこらえている。

「……俺さ、昨日まで男だったんだ」

昨日は男という名の罠

ソニアはアレンの言葉に、疑問符を浮かべている。もちろん、突然のそんな馬鹿げた告白を信じる方が、よっぽど馬鹿だ。

「昨日の夜、事務所に友人が遊びに来てよ……俺とじゃれてたらナノマシン打ち込まれてさ。朝起きたらこの有様だ、情けねえ」
もはや、自己嫌悪モードの真っ最中とでも言うべきか。アレンの様子は、十人見たうちの十人が落ち込んでいると答えるであろう状態だった。

「それによー。俺の本名、カフィンじゃなくてアレンなんだよな。女でアレンも変な話だけどよ、なんか周囲の視線が気持ち悪いって言うか、なんつーか。はあ……しばらく、放っておいてくれ」

「そんな言葉の直後で悪いが、カフィンに初任務だとさ」
アレンの言葉を遮るように。そして、否定するかのよう。いつの間にかそこにいた無音の言葉が、彼に突き刺さった。

「無音……ほんつとーに心臓に悪いな。お前」

アレンは呆れた様子で、更に椅子の上で縮こまった。

「ありがとう、最高の褒め言葉だ。で、初任務は技量を測るよなもんだからな、死ぬほど簡単だ」

アレンの席の前に、一枚の写真が提示される。無音は手帳を開くと、写真に見向きもしないアレンの横でそれを読み上げた。

「最近活動が活発になってきた殺し屋。“ラビット”の討伐と、結果の報告だ。情報収集はカフィンに任せると、上から命令があった。以上、初任務がんばってくれ」

アレンの前で用事を済ますと、まるで空間に溶け込むかのように。彼は歩き去った。

「へー、この子も可愛い」

ソニアが勝手に、机の上に置き去りにされた写真を手に取り、小

さく眩く。

「……ソニア……だったっけ？　俺を、拒絶しないのか？　つか、写真返せ」

ソニアから半ば奪い取るように、アレンはその写真を手の中に戻すと、ターゲットを確認する。が、その写真を見た途端。アレンは言葉を失った。

写真に写っているのは知った顔だ。昨日、丁度見た顔だ。そして、アレンがこうなった原因を打ち込んだ人間の……顔だった。

「ユリア……なんでだよ」

思わず、アレンは彼女の名を口から漏らす。

「あれ？　知り合いですか？」

「……そうだ。昨日、事務所に遊びに着たって話。ついさっきしたばかりか？　その遊びに来た奴……」

個々まで聞けば、ソニアも薄々それを感じ取っていた。

「こいつなんだよ」

予想通りの、答え。

友人殺しという名の罠

どうする？ 一回目の任務。 初仕事で、ユリアを殺せって？
冗談じゃない。 彼女が、“ラビット”？ 任務はラビットの討伐？

無音の言葉が、アレンの脳内でグルグルと回る。 何か解決策を講じようとも、油脂阿賀標的だという現実が邪魔をする。

初めてかもしれない、こんなに躊躇する任務は。 初めてだった。人のために、こんなにも何かを考えたのは。

「……アレン、泣いてる？」

ソニアの言葉に、アレンは耳を貸そうともしない。 涙が頬を伝う。

彼女を助ける術は無いのか？ いいや、あるではないか。 この組織を裏切ればいい。 だが、それだ単なる逃げにしかない。俺が断ったとしても、他の誰かがユリアを殺すだろう。どうするんだ？

しばらくして、アレンは吹っ切れたように笑った。 乾いた笑い声が、部屋の中に響く。

「で、もう覚悟したのかい？ ユリアって言うんだろ？ あの子、君の友達なんだろう？」

「知ってて俺に討伐しろって？ 中々、意地悪な難題吹っかけてくれるじゃねえか」

カフェでコーヒーをすする無音をどうにか探し当て、アレンは勝ち誇った様子で言い放つ。

「どうも、ユリアが標的だってんで気が動転しただけだ。 んじや、今から少し行って来る。 あー、そうだ。 今日はいいだろ？ 事務所にこのまま帰っても」

それだけを言い残すと、アレンはビルから出て直ぐに。 車に縛

り付けてあったバイクにまたがると、エンジンを掛けてアクセルを蹴飛ばした。

もう、夕方か……。 頬を撫でる風が冷たい。 冬が、近い。

「おい、ユリアー。 鍵あけるの面倒だからそっちからあけてくれ」

アレンの声に、事務所の中のユリアが反応する。 しばらく足音が続き、前触れも無く。 事務所の戸が開いた。

「お帰りー……遅かったんだね。 で、一個相談があつてさ」

「何だ？」

ユリアから話を切り出してきたか。 まあ、後で話す手間が省けてよかった。

「ボクさ、しばらくこの事務所に潜伏しようと思うんだ。 面倒なのが、私を追ってる」

面倒なの？ まあ、居候くらいなら……。

「問題ない。 で、俺からの情報。 初任務が、“ラビット”の討伐。 つまりユリア、お前の討伐だとさ。 で、反抗するか？」

アレンの問いに、ユリアは驚きを隠せなかったらしい。 だが、ユリアも直ぐにその言葉の意味を読み取った。

「いーや、しないよ。 ボクをその吟遊詩人^{ミンストレル}に連れて意味なんですよ？ 普通に呼べば、別に何もしないものを……」

「正解。 じゃ、表にバイクが止めてある。 ヘルメット被って、振り落とされないようにしっかりしがみ付いてろよ。 以上だ」

初任務完了という内容の報告

中々、詩人のボスは意地悪な奴らしい。バイクを走らせるアレンは、そんなことを考えていた。

人殺しを雇ったくせに、初任務が殺しではない。そのくせ、討伐などと殺しを連想させるキーワードを出す辺り。人間の心理をよく理解しているというか、何と言うか。

そんなことを考えている内に、日は沈んでいく。辺りが闇に閉ざされる頃。ようやく二人は詩人のビルへと到着した。

「さてと、ユリア。俺について来い。変なトコいじるなよ」アレンはそれだけ注意すると、ビルに入ると直ぐの受付に向かい、「無音はどこにいるかわかるか？」

用件を述べる。それに対し、受付の彼女はカウンターのしたから受話器を取り出すとアレンに手渡した。

『もしもし？ ああ、アレンか。で、どうした、その後は？』

“ラビット”は討伐したか？』

「ああ、問題なく。“ラビット”は反抗しなかったため、“討伐”できなかった。だが、ラビットの消失は確認した。で、報告はいいか？」

『そこで待ってろ、直ぐ向かう』

アレンの問いに答えを返す前に。無音は電話を切った。

「待った？」

待つ事物の三十秒。それくらいの時間で無音はそこにいた。どうやら結構近くにいたらしい。

西手も、毎度毎度突然出てこられるのは心臓に悪い。

「なあ、それどうにかなんね？」

「無茶を言わないでほしいな。オンオフ付けられない能力だから、無理。それはさておき、どうだったんだ？ “ラビット”が

消失って」

無音は不思議そうに、アレンに問いかける。　が、アレンは得意げな様子で。

「“カフェイン”に取り込んだ。　で、問題ないだろ？」

ふざけているとも取れる答えを、吐き出した。

「へえ、なるほど。　“カフェイン”が個人名か組織名か決まっていらないのを利用して、“ラビット”をカフェインとして取り込んだわけか。　オーケー、それで報告させてもらうよ。　で、明日はアレン。　君だけ出来てくれ。　明日の君は、結構忙しく予定があるらしいからね」

身体計測という名の難関

翌日、事務所で目を覚ましたアレンは面倒くさそうに前日の出来事を思い出した。吟遊詩人 ^{minstrel} の正社員になった。で、今日は朝が早い。

つまり、もう着替えて出かけるべきなのだ。

寝ぼけた様子で、アレンはコートに身を包むとその撥ねた長い髪を押しつぶすように撫でる。が、癖は取れない。仕方なく、水を被ってタオルでそれを拭いた。

「ブラシとドライヤー、必要だな」

そんなことを言いつつ、支度を済ますと車庫に止めてあったバイクにまたがり、エンジンをかける。そして、昨日同様。しばらくその足はアクセルを探すが、爪先意外届かないと判断すると、彼女はそれを蹴り飛ばした。

ここからは男声諸君お待ちかね。アレンの身体計測である。

詩人のビルについて、無音の第一声。

「今日、八回の医務室に行って身体計測しろって。上からの命令があった」

そういうことである。アレンの、身体計測。確かに、昨日やれって言われたっけか。

身長を測ったり、握力の測定をしたり。そんなことだけだろうと思っていた。だが、アレンの思わぬ計測が一個。

スリーサイズ。というより、バスト。

そう、胸回りの測定である。

「嫌だ、女物の下着は絶対断る！断じて、俺はそんなモン着ねえぞ！」

医務室で、アレンの怒号となにやら暴れるような音が廊下に漏れる。もちろん、社員は興味津々。男女問わず医務室の入り口を少しだけ開けて中をのぞく怪しげな集団を、更に事情を知らずにそこを通りかかったメンバーが何をやっているのかと、不審の目で見ていたわけなのだが。そんな視線を気にすることなく覗き続ける。アレンの組織への加入は昨日の出来事であり、アレンの事情を知っているのは無音とルイス。そしてソニアの三人だけだったのもあって、医務室から聞こえてくる可愛らしい少女の声の内容には、聞く者全てが耳を疑った。

「スーツは良くて下着は駄目なんですか？」

計測医の言葉に、

「スカートも嫌だ、無論。有り得ない」

アレンの怒鳴り声が返される。だが、個々の組織の連中はその殆どが能力者。それは、計測医も例外ではなかった。

「そうですか、気が引けますが……仕方ないですね」

その言葉の直後、アレンは体が固まったように感じた。そして、その感覚は間違ったものではなく、実際に身体は凍りついたように動かない。

「温暖氷結です、空気を固体化して君を氷付けにしました。抵抗はできませんよ、大人しくしなさい」

計測医が、スケールを持ってアレンにジリジリと歩み寄る。メガネの奥の表情は、まるで怯える相手を楽しんでいるかのような。そんな意地の悪い表情を浮かべて。

「いや、嫌だ、止めろ！……離せエエええ！」

アレンの悲痛な叫びが、廊下に木霊する。

「うーん、ギリギリCカップって所ね」

「何満足げな顔してんだよ」

アレンが怒ったように計測医を睨み付けるわけだが。彼女はその視線に何も感じないかのように今しがた測定結果を書き記した書

類をアレンへと投げ渡した。

「さて、それを持って無音君のところへ行きなさいな。運がよければ今日中に恋人成立するかもよ?」

彼女の言葉は、鳥肌物だった。

運がよ

渋い店主という名の難関

なんだかんだ。計測結果を渡された後に計測医がアレンにブラジャーを付けようと踏みよったことでアレンが上半身裸のまま。あられもない姿で医務室を飛び出す以外は、特にこれといって問題は無かった。

上半身裸で医務室を飛び出すことも、十分、大事件なのだが。アレンの思考では男のときと同様。特に、気にする事でもないという結論が下された。

そして、その先で無音と遭遇したという大事件もあったわけだが。無音は顔を真っ赤にして上着をアレンに投げ渡し、事件はそれで終結した。

慣れた手つきで無音の投げたコートを羽織ると、アレンは無音意連れられるがまま。更衣室へと放り込まれた。

「一応、ロッカーに名前があるはずだ。それ、お前用な。で、計測結果は僕が医務室に取りに行くとして、それまでに制服着て……そうだな。一階の喫茶店でいいか。そこでコーヒーでも飲んで待っててくれよ。朝飯くらいは奢ってやる」

無音はそういうと、オーラム金貨をアレンに投げ渡した。確かに、コーヒー大にしては多すぎる額だった。コーヒーがクプルム銅貨三枚で買えたとして計算すれば、二百杯分に相当する。

円に置き換えれば、一万八千円に当たる金額である。サラツとそんな金を奢りだという一言で人に渡すのか、無音^{アレ}は。

一体、何を考えているのやら。更衣室に向かうのを後回しに下の階へエレベーターで向かうと、喫茶店は直ぐ目の前にあった。

カウンターの適当な椅子に腰掛け、アレンの第一声。

「レギュラーコーヒー二杯、片方は角砂糖最低でも五つ入れて。で、そうだな……ブリオッシュ一個と、……あ、そのレアチーズエクレアってやつ一個」

カウンターの先にいた“渋い”と形容するのがとても似合うおじさんは、カップを二つ取ると角砂糖を片方に流し込み、淹れたばかりのコーヒーを注いだ。

コーヒーの横においてあったマドラーをそれに指すと軽くまわしてアレンの前に出す。

「もう一杯はどうするんだ？ ……彼氏待ちだろ、お嬢さん」

お決まりの台詞と言うべきか何と言うべきか。店主とも呼ぶべきそれは、アレンに言ってはならない発言を吐き出した。その言葉に、アレンは半ば怒りを露に、店主を睨む訳だが。

「ハッハッハ、冗談だ。ま、凶星ってところかい？ で、そうだな、後で出すよ。で、さっき注文したブリオッシュとエクレアだ。そう睨むなって、可愛い顔が台無しだぞ？」

カウンターの下の収納から、彼はその二つを取り出すとコーヒーの横に添えるように差し出した。

「……オッサン」

「何だ？ お嬢さん」

お嬢さんの言葉に、アレンは一瞬反応するが、馬鹿らしく感じたのか。反抗するのをいい加減に止めた。

「オッサンはさー、このビルが何か分かってて。それでここで働いてんの？」

アレンの言葉に、驚いた様子で瞬きを数度繰り返した。

「知っているよ。特にここ、第二支部は殺し関係者が多いからな。君が、今まで何人殺したかなんて聞くつもりは無いよ」

店主は相変わらず。マイペースを守りながらアレンのことを気遣っている。

なんか、気遣われるのは慣れないな。

「……俺さ、この間までずっと一人でいたから。仕事以外で人と無駄話するのは久しぶりだ」

「そうかい、そりゃ良かった。で、どうやら待ち人が来たようだな。無音、彼女連れとは珍しいじゃねえか」

アレンの気付かない内に。 相変わらず無音の姿がないと思っ
いたその空間から。

「ああ、珍しいだろ？ ケド、彼は男だから。 僕の彼女じゃな
いよ」

突如現れたかのように。 “ずっとその場に立っていた” 無音が
姿を現した。 相変わらず、神出鬼没だな。

「さて、どうやら僕の方までコーヒーを頼んでくれてたみたいだ
けど、僕はレギュラーコーヒー嫌いだからさ。 マスター、僕はホ
ットミルクにしてくれよ」

「いいのか？ 折角このお嬢ちゃんが注文してくれたのによ」

渋い店主という名の難関（後書き）

円に直してみた

オーストラリア金貨	……18000円	金	100%
アルゼンチン銀貨	……5000円	銀	100%
ハンガリー銀銅貨	……500円	銅	50%
クオータ銀銅貨	……100円	銅	75%
クアラルンプール銅貨	……30円	銅	100%
		銀	25%

名称は金属の含有量によって変化

一人称私という名の難関

「さて、腹ごしらえもすんだ事だし。確か、今日の君には任務が無かったね。僕も無いし、能力訓練室での鍛錬がいいところかな」

アレンは無音の言葉に流されるがまま。むしろ、このビル内のことを覚えるべきかと考え、無音に振り回される事を選択した。

「そういえば、ユリアは？」

「あいつは事務所で寝てる。基本、殺し屋って性格じゃないし。顔の割れてない人間だから、あの物件を買い取ったお嬢様って所だな。で、訓練室ってのは……何の拷問をする所だ？」

アレンの問いと、恐らくこれを見た誰もが同じことを言っただろう。連れてこられた部屋は壁一面血まみれ。赤い斑点どころか大量出血の流血騒ぎがあったのではないかと思わせる“水溜り”が数箇所。

そして、壁一面居並んだギロチンやらなにやら。処刑道具や拷問道具の数々。訓練をするところというイメージとは、大きくかけ離れた空間だった。

「良い質問だ。答えはYES、拷問室も兼ねてる。さて、そうだな。レベルゼロ能力者は初めてだし、どのコースにしようかな……」

室内の一角に設けられたカウンターに向かう。

「そうだな、ネイヴィーの凶悪殺人犯。アーガス・ロッチを相手に殺されずに殺せるか……でどうだい？」

金髪の男と談笑しながらアレンに戦闘相手を提案する。確か、それって連続殺人犯だっけ？

「まだ捕まってないって聞いたけど？」

「ああ、捕まってないよ。僕が殺しちまったからさ、世間的には身を潜めてるって認識だろうケド、あの脅威は排除した。で、

このイケてる彼がそれをコピーしたダブルとの戦闘を可能にする。
彼の能力でね、レベル？の中では恐らく最上位の力だと思うよ。
能力そのものの危険度はAだけど、コピーした相手によっては無
敵の力だ。 さて、ジャック、頼んだよ」

それだけ言い残すと、無音は再び景色に溶け込むように。 その
存在を消し去った。

恐らく、まだその場にいるのだろうか……死人で来ても認識は不
可能。 もはや景色である。

「さて、そうだな。 君がカフィンか、中々……可愛い顔してる」
今までと同じような台詞。 だが、もうアレンはそんなことで腹
を立てるつもりはなかった。 むしろ腹を立てていれば気疲れして
しまう。

「そりゃーどうも。 で、俺はどうすればいいんだ？」

「……そうだな、取り敢えず『俺』禁止。 一人称は『私』で統
一しろ」

ジャックの言葉が終わるとほぼ同時、アレンは我を忘れてジャッ
クに飛び掛っていた。

「何で俺が私って言わなきゃならないんだ！」

「その方が女らしくて可愛いだろうと思ってだ。 後で長老会に
その議案を提出しといてやるから、慌てなくてもいいぞ」

……このビルにいるのは、化け物ばかりだ。 今、そう感じた。
馬鹿げた会話と何気ない仕草。 そして、ただ単純に頭をかこう
としただけだったように見えたそぶりの合間。 背に隠れていた太
刀を片手で。 軽々と振り回すとアレンの蹴りをその峰で受け止め
たのだ。

「化け物かよ」

「いいや、俺は特に。 そうだな、階級は知ってるか？ 君はま
だ階級を貰ってないようだが、恐らくこの調子だとSって所か。
俺は、SSだから君じゃ勝てないってことになる。 まあ、俺単体
であれば君の勝ちだけだな。 さて、部屋の真ん中に居てくれ。」

俺がダブルを召還する」

能力発動と言う名の難関（前書き）

本日ラストです

五日の準備期間があつて、実際は一時間更新の予定でしたが、テストやら提出物やらなにやらイレギュラー要素と言う見落としが多々ありまして二時間置き更新に収まった次第です

よし、次こそは一時間更新します
今度は、前触れナシで

能力発動と言う名の難関

爆発音。そして、金属同士の擦れるような音が室内に響く。

「おー、やってるやってる。しかし、強いな。カフィン」

廊下にまでもれるその音を聞いて、ルイスが扉をくぐった同時。アレンの弾丸がこめかみを掠ると言ったハプニングはあったが、特にルイスは気にする様子も無くジャックの横に腰掛けた。

「どうだ、戦闘能力。……あれで何人目だ？」

大柄な大男のダブルを相手取るアレンの横で、ルイスたちは談笑を始める。

「確か、十三人目って所だ。アーガス・ロッチを瞬殺して、八人目まで。ランクAの上位者までは瞬殺決めてくれたぞ。九人目から、Aランク下位の危険人物を投入してるんだが……未だに息一つ上がってない。どうなってんだ、あの女……」

まるでありえないものを見ているような視線をアレンに向け、ジャックはルイスに問う。だが、その言葉を聞いて驚いたのは、ルイスも同じだ。

まさか、あんな十代の女の子が危険人物を相手取って瞬殺。それも、何人も。

驚かない方が、おかしい出来事だ。

「この訓練で、今のところ同じような結果を出した奴は？」

「聞いて驚け、吟遊詩人（ユグ）の大隊長一人だ。それも、大隊長に關しては今の十三人止まりだったからな。これの次倒しちまったら、カフィンの方が強いってことになる」

ジャックの言葉が終わると同時。アレンの蹴りが、金属音とともに大柄な男のダブルの顎にクリーンヒットした。そのままダブルは、ダメージの許容を超えたらしく、霧散して消えた。

「……やりやがったよ。隊長と並ぶとは、恐れ入ったぜ」

「で、まだ続ける？」

ジャックの問いに、アレンは無言で頷いた。汗一つ掻いている様子も無く息を切らしても居ない。

「そうか。ここからは“マトモな武器”が必要になるからな。その銃じゃ歯が立たないぞ？それでもやるか？」

「……能力を多用して戦えってことか？平気だ、あの“ブラックカフィン黒ノ棺”は弾切れが無い力だし、実際。アレの真価は、相手を固めて棺に納めることじゃない。できれば、外がいいんだが……」

アレンの言葉に、ジャックの口元は面白そうに笑っている。

「分かった、十四人目倒せたらいいぞ」

ジャックの言葉とともに、部屋を中心に再び。今度は黒い人の形を模した影のようなものが出現した。

今までの“人間”とは違う。黒一色のそれは召還されるが否や、間髪を居れずアレンに襲い掛かる！が、アレンはその起動を完全に読んだ上で。右手をその影に対し、突き出した。

「能力発動……“マイナーチェンジ・ブラックスピア黒ノ槍”」

彼女は、言葉によって。能力の引き金を引いた。突き出された腕に、言葉が纏わり付くように腕の周辺の空気が渦を巻く。そして――貫いた。

黒く鋭利な刃の先が、影を串刺しにする。影は数度痙攣すると、あつという間だった。

召還されて恐らく最短。五秒も無い内に、霧散した。

「……嘘だろ。……分かった、屋上に移るぞ」

能力発動と言う名の難関（後書き）

ネギの今更キャラクター紹介

アレン・ブラックウッド

性別…男↓女（現在進行形）

経歴には謎が多く、殺し屋業は彼女が十五歳のときに開業以降六年間に世間的に殺した人間は数知れず。

ただ、六年間も殺し屋をやっていたわりにその人数は三十人以下と、とても少ない。

ネギの都合…命名は結構適当に、ギリシャ神話のアレスから。そして、単純に。彼女が女にされてしまった理由は作者である私の興味本位。元々は、暗い殺し屋系の小説になる予定だったが、コメディ要素を取り入れようとして無理をした結果。今の状態に落ち着いた。

近々、挿絵を描いてみようか検討中

ユリア

性別…女

アレンと同じ孤児院出身。経歴も、アレン同様。十歳以降を辿る事ができない。

なにやら、秘密がある様子。

ネギの都合…特に、考えることなく。条件は長い金髪の女。と言う条件だけで、性格は元々決まっていたため名前は思いついたものをそのまま使用した。

後々、彼女には結構重役をやってもらおう予定。

音無 無音

性別…女↓男

経歴不明。彼の存在を認識できる人間が存在しなかったため、八歳から十四歳まで。彼の姿を確認した者は居ない。

ネギの都合…別作品で出演した際、無音の元々の性別は長い白髪赤目の女だったはずだったのだが、ここで再登場させた結果。ネギの気まぐれにより、性転換を無理に敢行。

やっちまった……と思ったが、元々、無口で暗いだけのキャラだったので、若干アホっぽい成分が混ざってよかったと思う。

何だかアレンにお熱な様子。

ルイス・オールディントン

性別…男

とある傭兵部隊出身。その間に数々の体術を身に着けた、戦闘マシーンとまで言われた危険人物。

吟遊詩人^{ミンストレル}には八年前から所属。過去を語ろうとはしない。

ネギの都合…別サイトで執筆していた作品に数話のみ登場させた噛ませ犬。正直、彼自身は相当強い設定になっていたのだが、小説内の不死鳥によって消し炭に。

キャラ自体は気に入っていたので、今回再登場させてみた。

能力の設定は、今回始めて与えた……ハズ。

ジャック

性別…男

知恵戦争^{ウィズデム}に投入された人工能力者“トランプ”のジャックに当たる事から、その名が付けられた。経歴は不明。

幼い頃から、“トランプ”の研究組織にいた。

ドッペルゲンガーを召還する能力は、つい最近身につけたものであり、彼自身の戦闘向けの能力はまた別に存在する。

太刀を武器として扱い、まるで棒切れのように振り回し、文字通り断ち切る事得意とする。

ネギの都合…元々、別の小説で使用したキャラを多用する癖のある

私だが、このキャラに関しては主人公だったと言う過去が存在する。何故、今はトレーニングルームの対戦相手を召還しているのか、どいういう経歴でそこに収まったのか。私にも謎である。

マスター
店主

性別…男

結構、ガタイがいい大柄な色黒男。温厚な性格で、好きなものはコーヒーの匂いなどと。その見た目からは判断がつかないようなものが好きだったりする。恋愛事情を気にする、見抜く、耳打ちするなど。結構お茶目な面も。

ネギの都合…失敗キャラ。考案当初はそんな感じでした。ですが、出してみたら案外。いいキャラだったのに驚いた。無いな、と思っていたわりに、今は結構好きなキャラ。まだこの

後何度か登場する予定。

未登場陣

クロア・ディナイアル

性別…男 ……超極度の甘党。

黒薙 童子

性別…男 ……世紀の天才。容姿は十代から二十代だが、その年齢は不明

アリソン・ForP・セイファート。通称…アリソン・セイファート

性別…女…とある海賊船の船長であり、年齢が四桁と言う怪物。

彼女に関しては登場は怪しい

ヴァン・ノクターン

性別…男 ……中世的な顔立ちで、紫がかったくろかみに真紅の瞳を持ち、大人しい性格とは逆に外見は恐ろしい。 礼儀正しく、気長で大らか。

まだ、若干数名

アドリブでの追加もあるので、どうなるかは私にも不明です

ファンクラブと言う名の陰謀

「先日、組織に加入した“カフェイン”について……どうなっている？」

薄暗い室内で。まるで直射日光を遮りその見に浴びることを恐れているのではないかと思うほど。それほどまで、嚴重に光を遮ったその中で。

黒い棺の中で上半身を起こし、闇の中で二つの真紅のメダマが。確かに、がなるような声でそう聞いた。

「その件であれば、現在ジャックが戦闘能力の計測を行っている
と聞いてますよ」

闇の中に、もう一人。透き通るような、女の声が、部屋の中を
駆け抜ける。

不意に、電話の着信音。

「……どうやら、計測結果が出たようですよ。驚きましたね、
初計測。初期値設定がSだったにも関わらず、測定結果はSSオ
ーバー……ボクより強い可能性があるとまで示唆していますね」

「ほう、面白い人材だな。その“カフェイン”とやらは」

棺桶の蓋が、閉まる音とともに、部屋の中に昼日中。カーテン
が取り除かれた結果、最も強烈な熱光線が降り注いだ。

「じゃ、このことは長老会に報告しておきますね。なにやら、
元老院ジジイの中には個人時代からのファンが居るようでして、今日は恐
らく。賑やかですよ、来ませんか？」

陽だまりの中、その長い金髪を揺らし、彼女は棺に問う。だが、
数秒の沈黙の後、

「やれやれ、行きたくない……ですか。分かりました、今回も
ボクが仕切っておきますね」

彼女は陽の光に身を包み、その部屋を後にした。

「今回の会議も、“彼”は欠席すると……？」

「そう言っていましたよ、最長老^{クソジジイ}」

黒い、覆面で彼女は顔を覆っている。今しがた、棺で眠っている彼の元から会議場となるビルの最上階に到着した所なのだが。どうも、先ほどとは様子が打って変わってひんやりと冷えた印象を受ける。

「……人形の分際が、最長老様をクソジジイとは何事だ！」

長い机に向かう数名の中の一人から、彼女に対して怒号が発せられる。が、彼女は知らん顔だ。

「でも、“彼”はいてもいなくても。喋らなければ結果は同じ。そーそー、ボクは確かに人形だよ。だから、後片付けたのむね」言葉が終わると同時。彼女は糸が切れた人形のように。突如、床に突っ伏すとピクリとも動かなくなった。それを見て、何人かは頭を抱えて呆れた様子で彼女を見る。

その長い金髪を散らし、ガラス球のような瞳で。遠くを見ているように、床に突っ伏している。

「……如何に我々人間の発展に貢献したと云えど、この無礼極まりない態度は受け入れ難いものだ」

彼女に対し、怒号を発した声の主が。気に入らない様子で呟いた。

「そう言うな。では、カフィンのこの後の用途について検討するとしようではないか」

*** **

「……一個、聞いておきたい」

ジャックが静かに、屋上に出てきたアレンに対し、問いかける。

「俺の能力は全快で使うと範囲が広いんだ。多分、屋上^{こゝ}でも狭いくらいだな」

しれっと、アレンは言い放った。三十メートル平米、九百平方

メートル内で、狭いと？ 大体、能力者の能力はプラスマイナス問わす。半径十メートル以上あれば相当広いと扱われる。

半径十五メートルで、狭い？ 馬鹿言うなよ。

「本気になった時の、能力の発動範囲はどれくらいあるんだ？」

ジャックの問いに、アレンは少し考え込んだ。だが、直ぐに彼女は口を開く。

「……多分、半径五十メートル以上。今まで能力を発動した最高が半径四十八メートル内だったからな。大体、そんなモンだろ。

本気で使ったことは今までないし、もう少し広いと思うぞ」

平然と答えるアレンに対し、ジャックの脳は凄まじい速さで回転を始めた。

半径五十メートル以上。聞けば聞くほど、出鱈目な能力範囲。

それが最高値ではないだって？ そんな、馬鹿げた事があるものか。

悪魔でもあるまいに、そんな広範囲に影響を及ぼすなど……人間のできた事ではない。

「分かった、それじゃー……ここだと狭いな。第八鍛錬施設に行って見るか、あそこは相当広い」

そう呟くと、ジャックは屋上の開放たれたままになっていた扉を閉じると、餅手にダイアルのついた鍵を差し込んだ。

ダイアルの数字を小声で復唱し、揃えたとそれを捻った。

ガチャリ。そんなベタな音とともに。鍵は開いた。

扉の向こうには、白い巨大な部屋。そして、無数の人間。白い巨大な箱の中のような、その空間に。見渡す限り、それが広がっていた。天井は恐らく、百メートル以上あるだろうか？

文字通り、

「箱の中……？」

そういうことである。アレンは思わず、そんな言葉を呟くわけだが。

付いて来たルイスは懐かしいと言った様子で。近くにいた戦闘

研修生の指導に当たる教師の下へと歩み寄っていく。

無音は……居ない？ いや、認識できないだけで、キッチリと付いて来ているに違いない。

「さて、それじゃ始めるぞ。ルイスが非難するように言いに行ってくれたからな。そこに立っててくれ。ここからは、エンドレス。俺が延々と影を召還するんだが、耐久で行くか？ それとも、俺が果てるか君が倒れるまでのエンドレスで行くか？」

「エンドレスに決まってるだろ？」

間髪をいれず。アレンはそれに答える。

「……俺の同時召還の最高数は百だ。じゃ、始めるぞ」

ジャックの言葉と同時に。アレンの足元から、無数の泡が吹き出したかと思うとそれが形を成した。

さっきの影と同じ。完全な影だけの、黒い人型の何か。それに対し、躊躇無く。アレンの第一波が箱の中を駆け抜ける！ 衝撃波のような、黒いリングが。

広がりながら、影を次々と吹き飛ばす！ 辛うじて避けた影、召還されてくる影。

そんなものなどお構いなし。次から次へと、集団を相手に彼女は平然と。慣れた手つきで次々と。銃を使うことも無く、黒い靄のようなものが。彼女の視界に映った影を次々と、拘束したかと思うと押しつぶす！

「……ジャック。止まってくれ、変だ」

だが、それは突然。アレンからそれを言い出した。

「前は、これだけ連続して使えば動けなくなるほど疲れたんだが、全く……疲れが来ない」

ヒトクイ人種と言う名の陰謀

アレンが嫌なものでも見るように、自分の両手を見る。汗一つ無ければ、体が異常な熱を持っているわけではない。

ただ単純に、疲れない。息も切れなければ、体力の底が無い。自分でもわけの分からない、奇妙な現象。

「君の知りたいことのヒントをあげよう。君に打ち込まれたナノマシン、トイクレクトは宿主の健康状態を最良に保ち続け、自らも進化を続ける能力がある」

アレンたちが潜ってきた扉と同じ。真っ白い扉をこじ開けるかのごとく、“それ”は固定された笑顔を、アレンに対して向けていた。

「……フーン、中々可愛い姿になったものだね。ボクは、チョット好みじゃないな」

真紅と形容するのが正しいかもしれない赤毛。マジシャンのようなシルクハットを被った、ピエロメイクの優男がこちらに対し、喋りかける。

「クロア……謹慎が解けたのか？ まさか、そういうわけじゃねえだろ？」

赤毛の“それ”に対し、ルイスが食って掛かる。が、“それは笑顔を崩すことなく、口を開く。

「いいや、『そんな馬鹿げた謹慎如きが俺を縛れると思ったか』そんな訳じゃないよ。『トイクレクトのデータが欲しくてね』今回は別件さ。ボクが開発協力をした彼女の体内にあるナノマシンのサンプルが欲しくてね『生きたまま解剖する』。何、殺しはしないよ、少し血液を取るだけさ。献血、してくれないかな？ 『やれ』君も、元に戻るかもしれないし」

“それ”の言葉の合間。 “それ”の口の中から、更にもう一つ。ノイズのような声が、時々彼の言葉に混ざる。

「……それは……嘘じゃないだろうか？」

アレンは疑り深く、“それ”に問いかける。

さつきから、どうしても。 “それ”は人間とは思えない、気分が悪くなる。 吐き気を催すような空気を、その身から吐き出し続けている。

「ボクは信用できないかな? 『四の五の言うな』 それとも、

僕の言葉に混ざるこの唸り声が怖いのかい? 『黙れクロア』心配

要らないよ、これはボクの腹の中の化け物が、騒ぎ立てているだけさ。 ま、信用できなくても力づくでどうにでもなる。 ボクのヒ

トクイ人種はキミたちを一瞬で殺すくらい、造作も無いことさ」

平然と、それは息を吸うように。

狂気を滲み出しながら、優しい言葉を吐きかける。 何だ、この男。

「人外が、信用できるわけ無ねェだろ！」

ルイスが再び食って掛かるも、クロアは平然と。 涼しい顔のま

までルイスを見据える。

直後、背筋を何か冷たいものが這うような感覚。 そして気付け

ば、目の前にいたクロアはルイスの背後に静かに。 元より、その

場にいたかのように。 静かに、佇んでいた。

『死にたいか? いい加減黙れよ、殺しちまうぜ?』

クロアの口から直接、ノイズのみが単体で吐き出される。 その言葉の心地悪さは、彼を中心に。 この白い空間をどす黒く染めた。

「よろしい」と言う言葉とともに、その空気は引いたものの。

ルイスとジャックは青い顔で、気分が優れない様子だった。

恐らく、無音も似たような状態だろう。

「……やっぱり駄目か。 『素晴らしい』 トイレクトがボクの

魔力を相殺してくれたらしいね。流石だ、技術提供してよかった」クロアは笑顔のまま、アレンに歩み寄る。が、次の瞬間。クロアの背から。腹に向かって銀色の金属光沢を輝かせる板が貫いた。

突然の出来事。その金属光沢のある板が、何なのか。理解するまでに長くはかからなかった。

先端は鋭利に尖り、その貫通力を誇示している。そして、板の両端にある刃が、その危険性をひけらかすように光る。単純な、ナイフ。

それをクロアの背後で握っていたのは、無音だった。

「何をするつもりだ？ 僕の可愛い後輩を、そんな奇妙な施設に連れて行くのは勘弁してくれたまえよ。にーさん」

「無音、居たんだ。相変わらず影が薄すぎて気がつかなかったよ」

腹をナイフが貫通しているにも関わらず。クロアは背後の無音に、屈託の無い笑顔を向ける。と言うより、何だ？

「無音……お前、クロアとは初対面じゃ……」

ルイスに言葉に、クロアソックリの笑顔を向ける。

「そうだぜ？ 言わなかったかな、僕の兄だって」

確かに、ソックリだ。以前に。

クロアはここでもうやく、口の中に溜まった血を吐き出すと、よろめきながら無音から離れた。

「恐ろしいね、その不可視の標識^{サイン}は。ボクの欲しい力の一つでもあるんだけど、今回はアレンだ。……の、前に」

クロアの言葉の途中。彼の手の甲にルイス同様の歯車が出現したかと思うと、それは音を立てて回転する！

『俺も不可視の標識^れが欲しい。お前は元々影が薄いんだ、ここですら死んだところで気付く奴は居ないだろうぜ？』

彼の中の“なにか”が、ノイズを吐き出したかと思うと次の瞬間。無音の首を右手で握り目、クロアはそれを高々と持ち上げた。

「テメエツ！」

ルイスが、隙だらけのクロアの飛び掛る。　が、クロアは平然とそれを蹴り飛ばし、無音に向けて。

その笑顔が、崩れた。　見開いた瞳は、まるで獲物を目の前に我慢の聞かない植えた狼のごとく。　無音に喰らいつき、視界から外そうとしない。

「……クロアとか言ったな。　無音そいつを離せよ、協力しねえぞ」

ここでようやく、アレンが口を開く。　アレンの言葉に、今しがた見せたあの狂気に満ちた視線が嘘だったかのように。　再び、あの笑顔のアレンに対して向けた。

「それは困るな『我俣言うな』。　ケド、確かにそうだよな。

仲間を殺すのは、ボクも感心できない『仲良しごっこか？　吐き気がする』。　じゃ、ここで交換条件だ。　『無音こいつを殺さない代わりにだ』君の両手の指を貰おうか。　どうだい、命に対して指十本で済む。　『安い。　安すぎる代償だろ？』案外、安く済むだろう？」

彼が最初。　人間に見えなかった理由がようやく分かった。　この中で、飛びぬけて圧倒的な力を有した上で。　人間とは思えないその残虐な思考を、知らず知らずに感じ取っていた所為だ。

「……わかっ」

「アレン、君に決定権は無い。　ボクを殺せばいいだろ、にーさん。　あんたの狙いは不可視インビジブルの標識サインが最優先だったはずだ。　だから、ボク有能力か彼女の研究結果。　どちらかが手に入れば……満足するんだろ？」

アレンの言葉を遮るように。　苦しさを押さえ込み無音が提案する。

提案に、クロアは笑顔を忘れ、驚いたような顔で、

「へえ、驚いたな。　無音、君。　彼女が好きなんだ」

ヒトクイ人種と言う名の陰謀（後書き）

§ネギの気まぐれキャラクター紹介§

クロア・ディナイアル

性別…不明。 外見、染色体はXYで男

無音の兄であり、人口人類。 吟遊詩人^{ミンストレル}が創ったわけではなく、ど

こからとも無く現れたと言う。

信用に欠け、呼吸をするかのごとく嘘をつく癖があるが、必要な嘘しか突く事はない。

IQは200以上であり、その観察能力は異常。

作者都合…元々は、クロス・ワールドと言う結構ありがちな名前の小説で使ったラスボス。 恐らく、その小説は現在過去ログに流れているか、もしくは相当昔のものだったので探しても出てこないかもしれない。

ちなみに、彼の名前はクロワツサンの頭三文字を取って、語呂を良くしただけ。

考え方が最も作者（私）に近いキャラクターの一人。 で、私としても結構重宝している。

恋愛感情不備と言う名の陰謀

「ボクは、どうもただの戦闘狂として作られたからわからないけどさ。無音、君は……どうやらまだボクより人間に近いらしいね。で、どんな気持ちなんだい？ その、“好きになる”って感情は」クロアは楽しげな様子で、無音に問いかけた。が、無音は口を閉ざし、視界が定まらない様子で。それでもなお、クロアを恨めしそうに睨みつけている。

クロアと無音は、恐ろしく対照的だ。

「……この状態だと、喋らせるのは無理か。分かった。キミたちの美しい友情とやらに免じて、この場でボクが暴れるのは止めておこう。さて……アレン。ボクと来てくれるかい？」

クロアは無音を床に置くと、アレンに対してその手を差し伸べる。……鉄くさいような匂いが、彼に染み付いていた。

「ああ、この歯車が怖いのかい？ 大丈夫だよ、『身体能力を増幅するだけの備品だ』これ自体に相手を傷つける力は無い」

その手を無視して、アレンは口を開く。

「分かった。で、お前についていけばいいのか？」

アレンの言葉。それに対し、クロアは呆れた様子で彼女を見る。

「……君さ、自分の外見どうなってるか。自覚は無いのかい？ ボクだってさ、センス無いなりに口調と姿に不自然が無いようにしているのに。女の子になった君はどうやら、一人称を変えることすらしないなんて。ボク並に、君も変な奴だね」

呆れた様子で、クロアは言い放った。だが、もう俺は気にしない。気にしたら負けだ。

「……悪かったわね。で、私はあんたに付いて行けばいいのかしら？ ……で、満足したか。この変態ピエロ」

アレンは顔を真っ赤にして。クロアに対していった。

「中々、可愛いんじゃないかな？ ま、ボクにはそんな事を感じ

取る感情は無いから知らないけど。　じゃ、“これ”に聞いてみるかい？」

クロアは自分の口の中を指差すと、直後。　黒い顔をかたどったような靄が。　彼の口からアレンを睨む。

『俺はテメーの玩具じゃねえぞ』

靄は呆れた様子でそれだけ言い終わるとクロアの口の中に引っ込んだ。

どうやら、先ほどから彼の言葉に混ざっていたノイズのような声の正体。　それが今の靄だったらしい。

「これからしばらくは、こいつに喋らせるつもりは無いよ。　さて、アレン。　ボクと一緒に来てもらおうか」

クロアは何の躊躇も泣くアレンの手を引き、来たときと同じ扉の前に立つと、来た時と同じ。　あのダイアルのついた鍵の番号を回し、扉の鍵を開いた。

ガチャリ。　またその音とともに、扉の向こうにはビルの屋上とは別の景色。　金属の壁や、機械類の数々がアレンの瞳に映る。

クロアはアレン似たいし、扉を潜るように促した。　言われるがまま。　アレンが扉を潜ると、クロアはそれを確認してその扉を閉じた。

***　***　***

「ルイス……無音の奴、死んでねえか？」

クロアがアレンを連れて行った後、ジャックがようやく口を開いた。　それに対し、ルイスは無音に歩み寄ると脈を計る。

そして、首を縦に振った。

「ああ、この様子だと後一時間無くて多分死ぬぞ。　どうする、運ぶか？」

ルイスの問いに、ジャックは答えを出す前に行動に出た。　携帯電話をポケットから取り出すと、数秒後。　メールをどこかに送る

と、倒れている無音の方を担ぎ、扉の鍵を回した。

「じゃ、ルイス。無音が死んだ場合、無音の事探しといってくれよ。俺はまあ、死なせないように手を尽くすつもりだが……多分この様子だと死ぬな。生き残ったとしても、後遺症残すだろうし。後遺症残るなら、無音が“殺せ”って言ってたからな。遺言には従わないと後がメンドイ」

言葉が終わると同時、ジャックは黙って無音を床に投げ捨てた。

「心臓止まった。こりゃ、死んだわ」

それに対し、ルイスが面倒くさそうに頭を掻く。

「じゃ、今回も俺が探しに行ってくるわ」

*** **

クロアに言われるがまま、扉を潜ってから。薬品の匂いが鼻につく。

刺激的な匂いもあれば、気分の和むような匂い。浮遊感をもたらすようなものまであった。何だか、変な気分だ。

「さて、じゃあその椅子に座って。悪いね、研究員が今ナノマシンの後始末でてんでこ舞でボク以外。手の空いているメンバーがいないんだ」

そう言うや否や。クロアは壁のフックに帽子を掛け、白衣を羽織る。

「格好だけさ」

そんなことを言いつつも、手早くアレンの向かいに椅子を引くと、自分もそこに座った。そして、手を伸ばして壁の取っ手を引いた。壁に収納されていた器具が引田さて、クロアの両脇に二つ。同じセットが並べられた。

「さて、腕出して。心配しなくていいよ、これは基本的に血を採るための注射だから」

クロアは器具の中をあさると、一本の注射針を手に取り、その鋭

利な先端をちらつかせる。注射程度の事であり、元殺し屋であれば注射針を刺す以上の傷を負うことだってざらにある。

が、アレンはそれを見た途端。顔を真っ赤にして椅子を立ち上がり、クロアから遠ざかった。それを見て、クロアは楽しげに笑う。

「ハハハ、成程ね。トイクレクトの精神似関与する部分か。

自分から、傷を負うことを避ける。つまり、アレン。君にはこのただの注射針が毒針に見えて仕方ないわけだ」

器具の山を押しのと、クロアはただの白紙にそれを箇条書きで書き殴った。

そんなことをしている間も、アレンは内からこみ上げてくる恐怖にされるがまま。涙を浮かべて、クロアを恐ろしい何かのように、壁に張り付いて見ている。

それを見ても、クロアは相変わらず笑顔のままだ。

「そんな怖がらなくなっただけいいじゃないか。採血は諦めたよ、ほら」

クロアは注射針を器具の山に放り込むと、アレンの体の震えは止まった。だが、どうも目に溜まった涙だけは引込めようが無い。

「……ホント？」

弱い小動物のような様子で、アレンは恐る恐るクロアに問う。

それに対し、クロアは相変わらず笑顔のままだ。

「本当だよ」

言葉の合間。器具の山からクロアはメスを手に取った。そして次の瞬間。

「ほら」

そんな優しい声とともに、アレンの右手に小さな痛みが走る。見れば、小さな切り傷が。

まるで、鋭利な刃物で謎ッ雇うな切り口である。そして、その鋭利な刃物は、クロアがその手に握っていた。さっき拾い上げたメスに、アレンのものと思われる血液が大量に付着している。

「ね、一瞬だったろ？」

「ヒドイよ、採血は諦めたって……」

アレンの言葉に対し、クロアは疑問符を浮かべた。

「さて？ 何のことやら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906y/>

大きな銃に小さな手

2011年12月4日04時52分発行